

講 話

福沢諭吉とパワーハラスメント

アイエス社労士事務所 所長 伊 藤 悟

昨今、どこかの知事がパワーハラを行ったとか多くの企業でパワーハラ防止措置を講じなければならぬとか話題となっておりま。私は労務管理の専門として、こうした研修等にも駆り出されることがあるのですが、パワーハラにならない、上手い指導を行った歴史上の人物をご紹介します。

明治の初めに登場した人物です。日本は当時、激動の時代でした。内務省衛生局に勤めていた北里柴三郎は、「一日自分の仕事、勉強を怠れば、一日国家の進歩が遅れる」と考え、ドイツのベルリン大学に留学をしました。

破傷風菌の純粹培養にわずか四年で成功したのです。大変優秀であったため、周囲からヘッドハンティングがありました。が、日本の医学のためにと考へお金にも目をくれず、帰国の道を選びました。

しかし柴三郎を待っていたのは厳しい現実でした。一説には母校東大医学部との軋轢があったと言われていますが、衛生局に戻れず失職の憂き目になったのです。その窮状を救ったのが福沢諭吉です。諭吉は柴三郎の高潔な人柄や崇高な志に胸を強く打たれ、芝公園内の所有地に私財を投じて伝染病研究所を建設した

のです。ここで柴三郎は研究を続けることになりました。研究所の中の養生園では患者のために牛を飼い搾乳していたので、感謝の意を込めて柴三郎は福沢邸へ牛乳を届けさせていました。ところがある日事件が起きます。

牛乳瓶にわずかな汚れを見つけた諭吉は、秘書の田端に次のような手紙を認めました。「この瓶の汚れが、あなたが運営している養生園のすべてを物語っている。患者に出す食事はいい加減で、園内の薬局は怠慢、医師の診察は不親切なのだろう。あなたたちは有頂天になっている。初心を忘れたのか。偉業を志す者は一生必死に努力してもようやくその半分しか達成で

きないもの。なのに何たることであるか……。」読んだ柴三郎は仰天し、ただちに諭吉のもとに向いて平謝りに謝りました。そして、この一メートル半にも及ぶ書簡を所長室に掲げて自戒したとのこと。諭吉は、(当時こんな言葉はありませんが)相手の成長を願い、しかし、戒めるべきことは言うべき、という対応をしたのです。パワーハラにならない適切な指導を見事に行いました。

時は流れ現在、諭吉はお札から引退し、新しいお札に柴三郎が登場したのも二人の縁が深いからでありましょう。きっと今頃天国で和気あいあいと語り合っているのではないでしょうか。